

「植民地」文学におけるジェンダーの考察への試み

－安西冬衛の散文詩「軍艦茉莉」を中心に－

劉 靈均

はじめに

奈良出身の詩人安西冬衛（1898～1965）は、日本のモダニズム現代詩の旗手と称されるが、彼は二十一歳から三十六歳までずっと大連に住んでおり、その地で現代詩人としての活動を始め、北川冬彦らと詩刊『亞』を創刊し、活躍していた。彼自身が「自伝（半風俗）」に「地理が詩をあざむかず、歴史が精神をいつはらざる所以にちかい」¹と述べているように、その詩は「租借地」であった大連の「地理」や「歴史」の影響を受けていた。それだけではなく、川村湊氏の指摘によると、彼は『亞』の創刊により日本のモダニズム詩を「大陸の一角、植民地都市としての大連で生まれ」²させた。

満州国や関東州のモダニズム詩人達と比べると、同時期に「植民地」であった台湾の内地詩人はもっと情熱的であった。菅原克也氏は伊良子清白の「聖廟春秋」と西川満の「媽祖祭」を例とし、台湾における内地詩人の詩作はエキゾティシズムの特性を持ち、「南方の想像力」に富み、詩のイメージは膨張と拡散の傾きがあると述べており、北原白秋、木下杢太郎、森鷗外の詩作からもこのような特性が見られることも指摘した。³これに比べると、北方の詩人たちはそういうエキゾティシズムの特性がなく、政治的な想像力をもっている⁴と、菅原氏は指摘している。

冬衛の詩はほかの『亞』の同人（吉田一穂や北川冬彦など）の作品と比べると、「思想的な深さや感情の流動美に欠けている」ことが少なくないと、江頭彦造氏は指摘する⁵。ここで注目すべき部分は、「感情の流動美」にかけていることである。大正から昭和初期にわたり、現代詩は主知的傾向が強くなり、「感情の伴はない理智の価値は模型に作った人体の如きものか」とさえ批評された⁶が、冬衛の作品はもう一層感情の流れが欠けていると点が見出される。

冬衛は、「春」という一行詩で評論者の注目を集めた：

「てふてふが一匹^{だつたん}韃靼海峡を渡つてゐた。」⁷

エリス俊子氏がこの詩は、『てふてふ』と『韃靼』の文字の視覚的対立を軸として、『胡蝶』をうたってきた日本詩の伝統へと回収され得ない切断の感覚を表

象していること、それが非親和的感覚を強調する『韃靼』のイメージによって効果的に提示されていることを確認⁸したが、「文字の視覚的対立」とも、「非親和的感覚」ともする要素が、「てふてふ」と『韃靼』の二つの言葉の「文字の形や意味、音や語源、それらの出会いや組み合わせ」⁹に対応するものではなかろうか。か弱い「てふてふ」と一見力強いイメージを持っている『韃靼』という言葉の間に秘めているジェンダー別による対立のイメージは、探究すべきところがあると思われる。

加えて、『軍艦茉莉』（1929）という最初の詩集に収録された同名の散文詩「軍艦茉莉」¹⁰の中にも類似の象徴的表現がある。大森忠行氏の指摘によると、「軍艦」を「茉莉（マリ）」と「読まれたとしたところに、従来の散文詩をこえる新しさがある」¹¹主人公の男性は「艦長で大尉だった」が、その姿は「われ乍らうらはしく婦人のやうに思はれ、彼の妹はずっと前から「黄色賊艦隊」の「ノルマンディ産まれの子（たち）」のよくない艦の機関長に犯されてゐた」。こんな「被虐的幻想」¹²には豊かな植民地的な象徴性が表れているが、このような象徴もある程度に詩人・冬衛が営んだジェンダー的なイメージを基礎としている。

他にも、冬衛が詩の中で用いているジェンダーの象徴が探究すべきところは数多いが、今回は範囲をしばり、冬衛の処女詩集『軍艦茉莉』の巻頭にある同名の散文詩「軍艦茉莉」を分析の対象とする。この詩は冬衛自身を比喩したものであるが、ここでは詩人・冬衛が「内地」日本から「越境」し、「外地」である「新しい」「植民」都市大連に来、その地の言語・人間・景色などを基に詩の中に作り上げた象徴が、ジェンダーの象徴とどう結びつくのかを考察してみたい。

一、『軍艦茉莉』における散文詩「軍艦茉莉」

冬衛の最初の詩集『軍艦茉莉』は、昭和4年（1929）年に出版された。冬衛自身によると、東京に出版された初版の千四百部のうち、「八百五十部が一応売れ、残部はいったん返品となって発行所へ戻ったが、後に普及版として改装市販されたので全部がほぼ売りつくされたようである」¹³。

ところが、この詩集の発刊以来、一番注目を集めるのは、やはり「春」¹⁴である。ただし、剣持武彦氏は、もし「春」が「詩人にとって会心の作であったならば、詩人はこの詩集の題名を「韃靼海峡」と題したであろうが、詩人はそれをしなく、『軍艦茉莉』という題名を選んだと指摘した。そして、「軍艦茉莉」¹⁵このことから、『軍艦茉莉』における「軍艦茉莉」の位置は、一連の短詩の中の一詩である「春」よりもっと指標的な位置を持っているかと思われる。

幼いころから、陸軍大佐の姿にあこがれ、押川春浪(1876～1914)の『海底軍艦』などの英雄冒険小説を愛読し、又父親から西域の叙事詩『大宛伝』¹⁶をあたえられ、「英雄の活躍をほしいままにし」た冬衛の作品には、ヒロイックな特質に富んでいる¹⁷のは、すでに本人や研究者により証明された。

ただし、彼は奈良から大連に移住してから第二年目(1921)に、すぐ右膝関節炎のため右脚を切断され、その後は「詩作に専念することになる」¹⁸と言われるが、江頭氏が、

「安西自身、右脚喪失以来、失意落莫の人という意識をつねにもっていた。それが中学時代水泳の手續で、ボート競技の選手だっただけに、彼の心内での切歯扼腕はいかばかりであったであろうか。」¹⁹

と指摘したように、「失脚意識」という植民地に与えられた(或いは植民地から与えられた)傷害はつねに青年冬衛の胸の中に潜んでおり、その意識が「軍艦茉莉」にははっきり見えるとも言えよう。詩のストーリーと対照してみると、航行中に「黄色賊艦隊」に捕まえられ、監禁された元艦長で大尉だった「私」は、恰も青春の半ばに突然に異郷で脚を失い、行動不自由になった冬衛の分身、あるいは冬衛自身を比喻した存在ではなからうか。又、この作品の中に用いられている「北支那」という言葉は、実際には満州と、冬衛が日本からそこへ移動して、そこで月を見ているという感性とを表現している。この「北支那」の月を見ていた安西の感性として、第一に、空間は日本からが北支那に移る移ったことを鋭く受け止めている。第二に、時間の流れに対する、詩人冬衛の感性について考えれば、大連における「右脚切断」という現実的な身体上的変化により、冬衛自身の日々の行動も日本にいた時よりもゆっくりになっていること、および、大連での生活スタイルが日々ゆっくり動くことの二つの要因により、詩人にとっては時間の流れも以前よりはゆっくりと感じられようになった。

「北支那」にある租借地都市大連には、ヨーロッパと中国の特徴が共存しており、それにまた日本帝国による新しい変貌もどんどん増えている。²⁰前述のように、その環境における青年冬衛の詩の言葉をはじめ、色調や詩全体の雰囲気などが「中国」と「西欧」の匂い、そして「中国」「西欧」「日本」の匂いがミックスされた匂いを同時に有していることは、「軍艦茉莉」からはつきり窺える。

二、「茉莉(マリ)」と読まれた軍艦

前述のように、大森氏は軍艦が「茉莉(マリ)」と「読まれた」としたところに、従来の散文詩をこえる新しさがある」と指摘したが、ここに論述した「新しさ」は、やはり「文字の呈出、場面設定への接続の仕方」に止まった。²¹

「茉莉(マリ)」という異国の香りが富んでいる言葉についての考察のなかで、一番詳しいのは、剣持氏の考察である。氏の考察によると、冬衛が軍艦を「茉莉(マリ)」と読ませた理由は以下のとおりである：
イ、「軍国主義、帝国主義の最もスマートな象徴といっている、硬質の、軍艦のイメージと、マリという西欧語の女性名のひびき」との組み合わせがいい。

ロ、冬衛の証言で、この「茉莉」は中国の名花²²で、清の詩人楊万里の詩句「茉莉独立幽更佳」からとった女性の名前に似合う優雅な言葉である。ただし、「茉莉」の正しい発音は「マツリ」であり、「マリ」という読み方は冬衛の独創のものである。
ハ、蒲原有明の後期の代表詩作「茉莉花」(マツリカ)に影響されたか。「茉莉花」は『源氏物語』の語感と、イギリス詩人D・G・ロセッテイ(1828～1882)風の官能性を有していることが、習作時代の冬衛には意識されていたと考えられる。

ニ、フランスのパリ派女流画家マリー・ローランサン(Marie Laurencin, 1885～1956)²³の芸術への関心。『亞』二十一号(1926)には「マリイ・ロオランサン夫人」と題した詩もあり、冬衛の西欧絵画に対する関心も見える。²⁴

以上の諸点から見ると、まず注目すべき部分は「茉莉(マリ)」の語源であろう。「マリ」の発音は「西欧語の女性名のひびき」があることや当時自分の絵の中で「繊細さと華やかさと官能性をあわせもつ、夢の世界の幸せな少女像を生み出していた」フランス女流画家マリー・ローランサン²⁵への関心などの理由から見れば、冬衛は西欧の感じを表現すると同時に、女性の(陰性の)柔らかさをも作り出そうとしていることが

分かる。

「茉莉」の漢字を選ぶことも、女性の名前を想像しているからである。これはすでに冬衛本人や評論者たちに何度も言及されているが、こちらはさらにもう一度冬衛のいう「詩集の題名とした茉莉は中国の名花で、『茉莉独立幽更佳』という清の詩人楊万里の詩を採って命（なづ）けたもの」²⁶という指摘を引用したい。実際、楊万里（1127～1206）は清の詩人ではなく、南宋の詩人である²⁷が、兎に角冬衛は「茉莉」という漢字にある「中国」の要素が分かり、そしてこの要素を詩のイメージを作るために用いていることが窺える。

つまり、軍艦に「茉莉（マリ）」という名をつけることにより、文字で「中国」の要素を引き入れ、音声で「西欧」の要素を引き入れ、そして両者はともに女性（陰性）の柔らかさをアピールし、硬くてそして陽性の特性を持つ「軍艦」のイメージを柔軟化した。ロシアの租借港になり、のち大日本帝国の「租借地」になった大連でしか味わえない「ヨーロッパ」の感じと「中国」の感じとの結び付き合いは、勿論エキゾティシズムに沿うものであったが、「植民地」の感覚も感じられる、菅原氏が、北方の「凝縮力がある」表現である²⁸と指摘する所以である。

ここからさらに「読まれた」という動詞の使い方に注目したい。前に引用したように、冬衛の詩集は「軍艦茉莉」と「命（なづ）けた」が、散文詩「軍艦茉莉」の中の軍艦は「茉莉」と読まれた軍艦である。主人公の男性がこういうセリフで物語りをし始めるのは、非本願的な感じがする。

「読まれた」という受身の表現は、もともと押さえられている感じを読者に与える。さらに「名付けられた」ではなく「読まれた」という表現は、軍艦がすでに「茉莉」と「名付けられた」ことを省略しているが、軍艦の名前はすでに決められていたものだという詩人の意図をさらに明白にさせるのである。結局、作品の中の雄々しい軍艦は「茉莉」と「名付けられて読まれた」という（女性化・陰性化の）二重の圧迫感に苛まれているが、構造主義の視点から見れば、軍艦「茉莉」は詩の作者（詩の世界の創造者）により「か弱くかかれた」ことで、その非力さがさらに窺えると思われる。

三、「艦長で大尉だった」「私」の姿

「一」の第二段の初めの部分は、主人公は「私は艦長で大尉だった。」とさっぱりとした感じで自分の（過去の）身分を説明し、そして「一」の最後まで自分はもうその身分を失ったということを隠そうとしてい

る。ここではまず「艦長」だった「私」、つまり「この軍艦をコントロールしていた」「私」の偉そうに装っていた無惨な気持ちがみられる。

そして、「私」の姿態は「娉娉（すらし）とした白暫な麒麟のよう」で、「われ乍ら麗はしく婦人のやうに思はれ」、「うつうつと阿片に憑かれてただ崩れてゐた」。先程まで男らしくて偉そうだった「私」の姿は、か弱い女へと変化した。

まず「娉娉（すらし）」²⁹の漢字は女偏の漢字を二つ使うことで視覚的に女らしいイメージを作り出している。そして「すらし」（「背が高く、格好のよいさま」³⁰）という振り仮名も後の「麗はしく婦人のやうに」と対応する。

「白暫な麒麟」の解釈については、大森氏によると、「白暫な」は「白い肌の」で、「麒麟」は「中国古代の想像上の動物。最も優れた人物の呼び名でもある」³¹となっている。「白暫」という言葉は、一般的には女性のきれいな肌を形容し、こちらは女性らしさを表す意図もあると思われるが、文脈から見ると、「私」はすでに「うつうつと阿片に憑かれて」おり、この「白」はおそらく不健康な色であろう。

しかも、こちらの「麒麟」は、大森氏が中国伝説上の吉祥な獣である「麒麟」を読者に連想させるが、こういう健康的な、縁起のいいイメージは、この詩の不健康的で、不吉なイメージとは合わないのではないかと思われる。³²

こちらの「麒麟」は、実存する生物のキリン、すなわちジラフ、Giraffeのことを指すかと思われる。日本においてはじめて輸入されたキリンは、1907年にドイツから輸入した二匹で、二匹ともに翌年に水土に合わないため死んでおり、1930年代の二度目の輸入でやっと繁殖成功となった³³。こちらの「キリン」は前句の「すらし」（「背が高く、格好のよいさま」）という表現にも合い、詩全体の病的なイメージにも合うのではなかろうか。

元艦長の「私」は自分の姿を「われ乍ら麗はしく婦人のやうに思はれた」と述べている。ここに見える「私」の姿は力を失った、蒼白な、病的な、薬物中毒の背の高い男性であるが、そのような「私」は自分のこともまた「麗はし」い婦人と表現することにより、「私」の自虐的な、そしてナルシシズムの個性が見え、主人公「私」の女性観も窺える。それに、「私」が男性「である」（それとも「だった」か）自分を女性と見ることにより、凝視の視点（gaze）の転換により自分を他者化することも分かった。³⁴

四、「私」と（「私」の想像に存在する）「私の妹」の不幸

兄である「私」が監禁され、「二」によると、「私」は妹が「ノルマンディ生まれの質（たち）のよくないの艦の機関長に犯されてゐた」事を「うすうす知つて」おり、「三」に主人公は「一瞬、私は屍体となつて横はる妹を、刃よりもはつきりと象（み）た」。

「二」の叙述に対して、剣持氏は「艦長の妹は同船していたのだが、フランス人の不良の機関長にすでにレイプされており、「私」はそれを知りながらどうしようもない絶望のもとにある。」³⁵と述べている。

ただし、「ノルマンディ生まれの質（たち）のよくないの艦の機関長」という叙述に、フランスのノルマンディ生まれであるのは「艦」であるか、「艦の機関長」であるかを確認しがたい。ノルマンディといえば特に造船で有名ではなく、それに確かにもし機関長がフランスの「白」人であれば、エキゾティシズムの感じが強められ、詩の「白い」雰囲気合うが、語順について解釈しがたいので、率爾にこれだけで機関長が「ノルマンディ生まれ」の人間だということを断言できないであろう。³⁶いづれにせよ、本当の意味を確認しがたいとしても、冬衛が「ノルマンディ」という固有名詞を使うこと確かに意識しており、エキゾティシズムの雰囲気を作るためにこの言葉を用いることが言えよう。

「私は監禁されてゐ」ながら、どのように妹に関する情報をわかるのかも読者に疑問を持たせる。「監禁されてゐた」「私」が語っている妹の受難（犯されることと殺されること）は、「私」の目で実際に見ることがない。「うすうす知つてゐた」というよりも、主人公の神経質的なキャラクターから見れば、おそらく自分の想像により生じられたことであろう。「三」に「いやな滑車の音」を聞いた主人公がまず「陰気な水面に下りて行く残忍な木函³⁷を幻覚し」、「一瞬、私は屍体となつて横はる妹を、刃よりもはつきりと象（み）た」。ここにおける「私の妹」の不幸は「幻覚」され、「象（かたど）」られたものでもあろう。「象（かたどつ）た」に「象（み）た」という読み方を振り付けることは、前述の冬衛慣用の言葉のトリックであり、主人公がすでに「想像」の世界と「真実」の世界との境界線をはっきり分けられなくなったことも象徴するのである。

五、「虐待し合い」による「至福」のクライマックス

関連して、さらに探究すべきところは、「私」の受難と「私」の妹の「想像された」受難の関係である。

イ、「私」の受難

「私」の受難は、主に監禁されたことと、妹の（想像の）受難に苦しんでいることとに分けられる。監禁されたことにより、「私」は軍艦と地位（軍階と身分）を失っただけではなく、姿も女性らしくなり（語られ）、自分を他者化することにより男性の尊厳を失う（失われる）ことにも苦しんでいる。そして、妹を守れない「私」は自分の非力を嘆きながら、妹の受難を想像し、その受難に苦しんでいる。

ロ、「私」の妹の受難

「私」の語りによると、「私」の妹は機関長に犯され、「三」には殺され「屍体」になり、「陰気な水面」のしたに沈められたが、ここにおける妹の受難は、全て語り手である「私」の言葉により営まれたものである。つまり、「私」の妹の受難は、実際に虐待されることより、兄に当たる「私」に想像されることであろう。

ハ、「私」と（想像の中の）「私」の妹との「虐待し合い」

前述のように、「私」は「私」の妹の受難を想像し、その受難に苦しんでいるが、「妹の受難を想像する」ということは言い換えれば、「私」は「想像の中で妹を受難させる」、即ち「想像で妹を虐待する」ことではなからうか。又、妹の受難を想像しながら、「私」自分が「想像の中の妹」と一体化し、「私」自身を苦しめている——逆に言えば、「私」自身と一体化した「想像の中の妹」は、受難により「私」を苦しめているのではなからうか。

二、「私」の〈虐待・被虐〉による〈苦しみ・楽しみ〉

「私」は虐待する・虐待されることによる受難に「苦しんでいる」が、自分の語りで作った『監禁されて』いる『娉娉（すらり）とした白暫な麒麟のやう』で『麗はしく婦人のやう』な「私」の姿が、「安西の倒錯されたヒロイズム意識の具象化」³⁸であると江頭氏は指摘した。ただし、江頭氏曰く「倒錯された」という言葉は、当時日本全国における「向上的国民精神（ナショナリズム）」³⁹との対照であろう。陽気の、「向上」の、陽性の「国民精神（ナショナリズム）」に対し、「倒錯」のものはおそらく陰気の、墮落の、陰性のものではなからったのではないであろうか。つまり、「私」は語りの中に自分の雄々しさを強調せず、逆に自分の女らしさをアピールすることにより、「倒錯」の悲劇の英雄となつたと思われるのである。

以上の推論により、「私」が自分の語りにより英雄となり、受難（虐待・被虐・自虐）しながら至高の幸

福のクライマックスに至った。江頭氏が提示した「倒錯」はジェンダーの倒錯でもあり、心理の面から見れば、自分の不正常的部分をアピールし、即ち露悪による英雄となること自体も「倒錯」の一表現である。

六、おわりに

前述のように、「軍艦茉莉」は青年冬衛の自分の生命のたとえであり、そして植民都市・大連での右脚踏断という（不運の）体験の比喻でもある。ただし、本稿で特に強調したいのは、この散文詩における主な象徴は、女性というジェンダーのか弱いステレオタイプを使い、主人公の男性は観念上に女性に変化することにより弱められ、しかも、想像の中の自分が愛する女性である「妹」と「虐待し合う」ことにより、自分を女性と一体化し、自分のことを一層弱体化させるという詩のモチーフを基にした表現法である。加えて、この女性化（無力化）された男は宿命に対する非力を嘆くと同時に、ジェンダーの「倒錯」しかも「錯乱」の英雄となった。冬衛は前述のジェンダーの要素と「植民地」の要素を音声・文字・景色・象徴などに加え、それらを結びつけ、北方特有の「凝縮力」のある「エキゾティシズム」を作り出し、そこから冬衛曰く音声・文字・景色・象徴等の符号の「コレスポンドンス（出会い）」⁴⁰を表現することにより、日本のモダニズムを生じさせたのである。

ただし、ジェンダー別による「虐待・被虐待」や「圧迫する・される」の象徴と、植民地の民族の間における「圧迫する・される」などの問題とは結びつき合ったかどうか、本稿の討論範囲には入っていない。この問題について、また冬衛のほかの作品や日記などを全面的に深く考察しなければ、断言することは危ないではなからうかと思われる。

本稿は北方の「植民地文学」におけるジェンダーの象徴に対して細かく考察しようとする試みの第一歩である。将来は安西冬衛の作品をはじめ、満州国におけるほかの日本語文学⁴¹の作品のジェンダーと「植民地」の要素との関係を究明、比較し、さらに台湾・朝鮮の植民地文学と比較したいと思う。これで日本文学の研究やアジア圏の国家の友好に些細な力を捧げられれば幸いである。

七、テキストおよび参考資料（五十音順）

イ、テキスト

安西冬衛、「軍艦茉莉」『安西冬衛全集 第一巻』（東京・宝文館、1977年）。『軍艦茉莉』（1929）に収録。

ロ、単行本に収録された資料

阿毛久芳「モダニズム詩の問題」日本文学協会編『日本文学講座10 詩歌—Ⅱ—近代編』（東京・大修館書店、1988年）。

安西冬衛「自伝（半風俗）」『全詩集大成 現代日本詩人全集第八巻 金子光晴・吉田一穂・安西冬衛・北川冬彦』（東京・創元社、1954年）。

安西冬衛「春」『安西冬衛全集 第一巻』（東京・宝文館、1977年）。『軍艦茉莉』（1929）に収録。

安西冬衛「茉莉は生きている」『安西冬衛全集 第五巻』（東京・宝文館、1978年）、初出は『旭区ニュース』（1961.3.7.）。

安西冬衛「『軍艦茉莉』書志」『安西冬衛全集 第五巻』、初出は『本の手帳』第八号（1961年10月）。

江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」、安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報。

エリス俊子「表層としての亜細亜——安西冬衛と北川冬彦の詩と植民地空間のモダニズム」モダニズム研究会編『モダニズムの越境Ⅰ・越境する想像力』（京都・人文書院、2002年）。

大森忠行「安西冬衛」伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』（東京・角川書店、1969年）。

尾形亀之助「詩集 軍艦茉莉」安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、初出『詩神』六巻八号（1930年8月）。

川村湊「植民地文学とは何か まえがきにかえて」『南洋・樺太の日本文学』（東京・筑摩書房、1962年）。

黒川創「解説 螺旋のなかの国境 黒川創編『<外地>の日本語文選2 満州・内蒙古／樺太』（東京・新宿書店、1996年）。

黒川創「著者と作品について」黒川創編『<外地>の日本語文選2 満州・内蒙古／樺太』。

剣持武彦「安西冬衛「軍艦茉莉」とポー「大鴉」」江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』（東京・宝文館、1992年）。

菅原克也「『南蛮』から『華麗島』へ——日本近代詩におけるエキゾティシズム」菅原克也等編『ポスト・コロニアリズム——日本と台湾』（東京・東京大学比較文学比較文学研究室、2003年）。

村野四郎「安西冬衛」『鑑賞現代詩 3 昭和』（東京・筑摩書房、1962年）。

吉田精一「知性詩の成立と展開——「詩と詩論」創刊以後終戦まで」『吉田精一著作集 第十一巻 近代詩Ⅰ』（東京・桜楓社、1980年）。

ハ、雑誌論文

紅野敏郎「逍遙・文学誌 (18) 「亜」——大連からの声、安西冬衛・北川冬彦・滝口武士ら (上)」『国文学 解釈と教材の研究』1992年12月 (東京・学燈社)。

紅野敏郎「逍遙・文学誌 (19) 「亜」——大連からの声、安西冬衛・北川冬彦・滝口武士ら (下)」『国文学 解釈と教材の研究』1993年1月 (東京・学燈社)。

比良輝夫「安西冬衛と「てふてふ」」『語学文学』1997年3月 (札幌・北海道教育大学)。

村野四郎「軍艦茉莉」『国文学 解釈と鑑賞』1962年6月 (東京・至文堂)。

二、単行本

何小顔『花的檔案』(台北市・台湾商務印書館、2002)。

川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』(東京・岩波書店、1990年)。

川村湊『文学から見る満州「五族協和」の夢と現実』(東京・吉川弘文館、1998年)。

黄意雯『日本統治期の台湾文学作品に見る小説言語』(台北市・致良出版、2007年)。

廖炳惠編・著『關鍵字200』(台北市・麦田出版、2003年)。

ホ、デジタル化資料

ウィキペディア日本語版 (<http://ja.wikipedia.org/>)

ウィキペディア繁体中国語版 (中文維基百科) (<http://zh.wikipedia.org/>)

電子ブック・広辞苑第四版

北京大学中国語言文学系ウェブサイト「全宋詩分析系統」テストバージョン (<http://chinese.pku.edu.cn/songPoem>)

「マリー・ローランサン美術館」オフィシャル・ウェブサイト (<http://greencap.co.jp/laurencin/>)

参考辞典

諸橋轍次等編『廣漢和辭典』(東京・大修館書店、1991年)
『辭源 (大陸版)』(台北市・遠流出版、1988年)

注

- 1 安西冬衛「自伝 (半風俗)」『全詩集大成 現代日本詩人全集第八巻 金子光晴・吉田一穂・安西冬衛・北川冬彦』(東京・創元社、1954年)、P234。
- 2 川村湊「モダニズムと郷愁——大連」『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』(東京・岩波書店、

1990年)、P64。

- 3 菅原克也「「南蛮」から「華麗島」へ——日本近代詩におけるエキゾティシズム」菅原克也等編『ポスト・コロニアリズム——日本と台湾』(東京・東京大学比較文学比較文学研究室、2003年)、P134。
- 4 菅原克也、同文、P125。
- 5 江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」、安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報 (東京・宝文館、1977年)、P2~3。
- 6 百田宗治が編集する雑誌『今日の詩』(1930年12月)に載せた野口米次郎のアンケート。引用は阿毛久芳「モダニズム詩の問題」日本文学協会編『日本文学講座10 詩歌—II—近代編』(東京・大修館書店、1988年)、P226による。
- 7 安西冬衛「春」『安西冬衛全集 第一巻』、P32。
- 8 エリス俊子「表層としての亜細亜——安西冬衛と北川冬彦の詩と植民地空間のモダニズム」、モダニズム研究会編『モダニズムの越境 I・越境する想像力』(京都・人文書院、2002年)頁104。
- 9 大森忠行「安西冬衛」、伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』(東京・角川書店、1969年)、頁102。
- 10 以下安西冬衛「軍艦茉莉」の引用は、すべて『安西冬衛全集 第一巻』、P18~19による。
- 11 大森忠行「安西冬衛」伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』、P101。
- 12 江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、P3。
- 13 安西冬衛「『軍艦茉莉』書志」『安西冬衛全集 第五巻』(東京・宝文館、1978年)、P455。初出は『本の手帳』第八号 (1961年10月)。
- 14 『軍艦茉莉』のなかには、「春」をタイトルとする一行詩が二首ある：「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つてゐた。」と「鯨が地下鉄道をくぐつて食卓に運ばれてくる。」本稿は前者しか討論しないので、あえて区別しないようにする。
- 15 剣持武彦「安西冬衛「軍艦茉莉」とポー「大鴉」」江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』(東京・宝文館、1992年)、P197。
- 16 「史記・大宛伝」か不明。「苑」の漢字は、江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、P1によりそのまま引用。
- 17 江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、P1
- 18 ここはエリス俊子「表層としての亜細亜——安西冬衛と北川冬彦の詩と植民地空間のモダニズム」モダニズム研究会編『モダニズムの越境 I・越境する想像力』、P103~104の説による。
- 19 江頭彦造「安西冬衛の詩の世界」安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、P2。
- 20 今の大連はまた租借地時代の特徴を残っている。大連の町の景色やその変化などについて、川村湊「モダニズ

- ムと郷愁——大連』『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』には詳しく紹介されている。
- 21 注9と同じ。
- 22 ジャスミンのこと。北京語で「ムーリー」(Muò lì)と読み、夏には白い花が咲く。
- 23 当時は「マリイ・ロオランサン」と表記され、剣持氏の論文もそう表記した。ここでは現在慣用の表記方に改める。
- 24 以上イからニまでは、剣持武彦「安西冬衛「軍艦茉莉」とポー「大鴉」」江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』、P200～202の指摘による。
- 25 マリー・ローランサンの紹介は、長野県茅野市の「マリー・ローランサン美術館」のオフィシャル・ウェブサイト (<http://greencap.co.jp/laurencin/>) から引用した。
- 26 安西冬衛「茉莉は生きている」『旭区ニュース』(1961.3.7.)。引用は剣持武彦「安西冬衛「軍艦茉莉」とポー「大鴉」」江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』、P200による。
- 27 楊萬里の詩「送抹利花與慶長」(北京大学中国語言文学系ウェブサイト「全宋詩分析系統」テストバージョン (<http://chinese.pku.edu.cn/songPoem>) による)には「抹利獨立幽更佳」であるが、中国語の「茉莉」の語源は古インド語の音訳であり、「抹利」「抹麗」「没利」「末麗」「抹厲」などの書き方があった。何小顔『花的檔案』(台北市・台湾商務印書館、2002) P172。
- 28 菅原克也「「南蛮」から「華麗島」へ——日本近代詩におけるエキゾティシズム」菅原克也等編『ポスト・コロニアリズム——日本と台湾』、P134。
- 29 この「すらり」に当たる漢字は、各氏や各選集に引用される時に違う漢字(「娉娉」や「嫂々」)を使っているが、こちらは『安西冬衛全集 第一巻』P18～19(「娉娉」)に従う。「娉」は「へい」と「ほう(ほう)」と音読み二つあるが、ここは「へい」で、「美しいさま」の意味である。「嫂」(そう)は「兄の妻」の意味で、こちらにはもちろん意味が合わない。諸橋轍次等編『廣漢和辭典』(東京・大修館書店、1991年) P884～885とP899、『辭源(大陸版)』(台北市・遠流出版、1988年) P409とP413による。
- 30 意味は広辞苑第四版「すらり」②の条目による。
- 31 大森忠行「安西冬衛」伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』頁97。
- 32 ちなみに日本語や韓国語の「麒麟(キリン)」は、中国の明朝の呼び名である。鄭和が東アフリカからこういう動物を中国に持ち帰り、頭の上の角から伝説の中にある祥瑞の獣「麒麟」に似ることにより(また色々な説がある——筆者)、本物の麒麟とされた。現代中国語には「長頸鹿」(Cháng jǐng lù、長い頸<首>を持つ鹿)という。ウィキペディア日本語版 (<http://ja.wikipedia.org/>)「キリン」の条目及びウィキペディア繁体中国語版(中文維基百科) (<http://zh.wikipedia.org/>)「長頸鹿」の条目による。
- 33 ウィキペディア日本語版「キリン」の条目による。
- 34 「gaze」(凝視の視点)の定義は、廖炳惠編・著『關鍵

- 字200』(台北市・麦田出版、2003年)、P120～121による。
- 35 剣持武彦、「安西冬衛「軍艦茉莉」とポー「大鴉」」江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』、P207。
- 36 ただし、同時代の詩人尾形龜之助(1900～1942)もこういう風に解説した。ここはやはり究明したい。尾形龜之助「詩集 軍艦茉莉」『詩神』六卷八号(1930.8.)、ここは安西冬衛『安西冬衛全集 第一巻』月報、P9による。
- 37 樞のこと。大森忠行「安西冬衛」伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』頁97による。
- 38 注19と同じ。
- 39 注19と同じ。
- 40 大森忠行「安西冬衛」伊藤信吉等編『モダニズムの旗手たち 現代詩鑑賞9』、P92。
- 41 ここは「日本語」で書かれた文学作品を指す。

【付録】

安西冬衛「軍艦茉莉」

一

「茉莉」と読まれた軍艦が、北支那の月の出の碇泊場に今夜も錨を投れてゐる。岩塩のやうにひつそりと白く。

私は艦長で大尉だつた。娉娉とした白皙な麒麟のやうな姿態は、われ乍ら麗はしく婦人のやうに思はれた。私は艦長室のモロッコ革のディワ^んに、夜となく昼となくうつと阿片に憑かれてただ崩れてゐた。さういふ私の裾には一匹の雪白なコリー種の犬が、私を見張りして駐つてゐた。私はいつからかもう起居^{たちろ}の自由をさへ喪つてゐた。私は監禁されてゐた。

二

月の出がかすかに、私に妹のことを憶はせた。私はたつたひとりの妹が、其後どうなつてゐるかといふことをうすうす知つてゐた。妹はノルマンディ産れの質のよくないこの艦の機関長に夙うから犯されてゐた。しかしそれをどうすることも今の私には出来なかつた。それに「茉莉」も今では夜陰から夜陰の港へと錨地を変へてゆく、極悪な黄色賊艦隊の麾下の一隻になつてゐる——悲しいことに、私は又いつか眠りともつかない眠りに、他愛もなくおちてゐた。

三

夜半、私はいやな滑車の音を耳にして醒めた。ああ又誰かが酷らしく、今夜も水に葬られる——私は陰気な水面に下りて行く残忍な木函を幻覚した。一瞬、私

は屍体となつて横はる妹を、刃よりもはつきりと象
た。私は遽に起とうとした。けれど私の裾には私を張
番するコリ一種の雪白的な犬が、釘のやうに冷酷に私を
ディワンに留めてゐる——『噯呀！』私はどうする
ことも出来ない身体を、空しく悶えさせ乍ら、そして
次第にそれから昏倒していつた。

四

月はずるずる巴旦杏のやうに墮ちた。夜陰がきた。
そして「茉莉」が又錨地を変へるときがきた。「茉莉」
は疫病のやうな夜色に、その艦首角を廻しはじめた。
——

りゅう・れいきん／台湾・国立台湾大学 日本語文学科 修士課程1年
dearlittlecookie@gmail.com